

北佐久郡浅科村土合1号墳の調査

浅科村文化財保護委員会

1970

北佐久郡浅科村土合1号墳の調査

畠山忠雄

1. はじめに

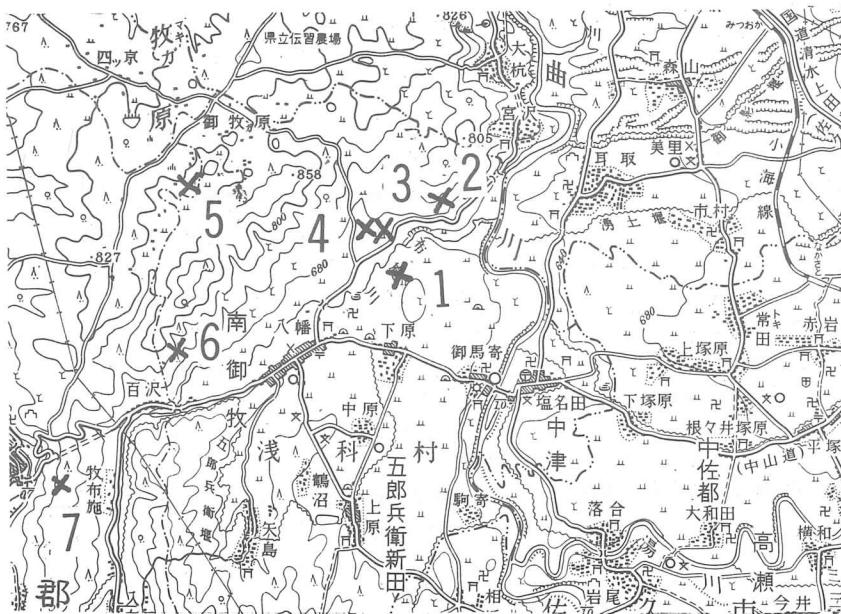
浅科村教育委員会と浅科村文化財専門委員会では、同村文化財保護条例に基づいて、村内の文化財を調査して浅科村文化財の指定を計画している。その調査対象の1件として、明治末年に調査され貴重な遺物を出土している土合1号墳をとりあげた。この古墳は明治32年に発掘調査され（註1）、遺物の大半は東京国立博物館に収蔵されており、玉類は地主が保管している。古墳の封土ではなく、石室が露呈し、天井石は1枚残すのみで、奥壁もなく、石室はヤックラとして利用されて石や土砂がいっぱいあつた。このように古墳の荒れ方がひどく、今後はさらに石室もくずれることも考えられるので、石室を清掃して実測図を作り、できれば浅科村史跡に指定して、

その保存、保護につとめたいと考えた。清掃にあたっては、長野県教育委員会と連絡をとり、県教委指導主事神村透、小諸市与良清、浅科村教育委員会、浅科村文化財専門委員の参加で、昭和44年5月13日に実施した。

2. 地形

行政地域は、北佐久郡浅科村五郎兵衛新田土合

千曲川は佐久平中央部で、大きく蛇行し、善光寺平へV字状渓谷を形成し、北流する。この西岸、高位の平坦地が御牧ヶ原、八重原台地である。この台地は佐久平より150mの比高があり、さらに中央を鹿曲川が北流し、台地を2分する。東が御牧ヶ原、西が八重原と呼ばれている。この御牧ヶ原は、ゆるやかな起伏の平坦面が広く展開し、東部が高く、西及び西北に傾斜している。原の



第1図 土倉古墳群付近の遺跡分布図(1:75000)

- 1、土合古墳群
 - 2、火の雨古墳
 - 3、入の沢古墳群
 - 4、望月牧駒込遺構
 - 5、尾尻鉄鐘
 - 6、柳沢古墳群
 - 7、瓜生坂祭祀遺跡

には僅かに減じ、風生坂を経て、蓼科火山の北麓に連なる。これ等の台地にかこまれた、御牧ヶ原南端麓の三角形状の地形が、浅科地方である。蓼科北麓から流出する布施川は漏斗状地を形成している。この中央部は、東山道途上の地点もある。

土合古墳群はこの扇状地の北部にあたる(第1,2図)。御牧ヶ原台地は「望月牧」の放牧場として著名であり、牧場の「野馬除」土堤が残っている。また台上には須釜原という

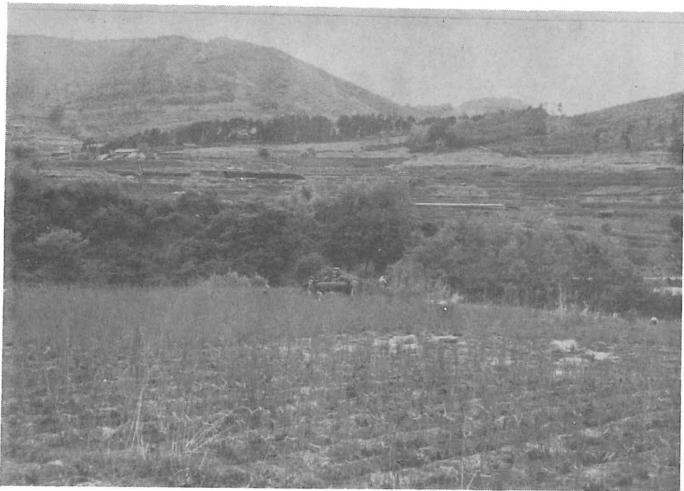
地名もあって、その一帯及び八重原には須恵窯址が密集している。尾尻からは貞觀時代の鉄鐘が出土しており、私が保管している（註2）。この御牧ヶ原から馬を追落したところが、東山麓の桑山部落にある「駒込」と思われ、その付近の山腹には2条の土手状空堀が残存している。近世中山道開通に伴い、集落は南の平坦地へ移住し、八幡、望月両宿を形成したが、桑山には一部集落跡が残っている。私が奉仕している、八幡社高良社旧御本殿は重要文化財でもあり、牧場との関係が考えられる。それ等の人々が居住していたと思われる。この浅科地方を流れる布施川の両岸には水田地帯が広がり、千曲川に流入する付近は、北から台地がせまり、深い峡谷の中を流れ、八幡の平を扼している。この浅科扇状地の北端の、布施川両岸の山麓に小円墳群があり、中には積石塚もみられる。

土合古墳群は、五郎兵衛新田のある台地北端、布施川にのぞむ段上端にあたる。古墳は4基ある。川の対岸には火の雨古墳、入り沢1, 2号墳があり、同2号墳は積石塚のようである。さらに西台地には百沢に柳沢古墳群、瓜生坂祭祀遺跡が位置している（註3）。

3. 発掘記録の整理と清掃

土合古墳群は4基あり、1号墳が良く残っているほか、2号墳は石室がくずれて「ヤックラ」となっている。ここでは直刀が出土している。3号墳は石室がくずれて、大きな石がたまっている。4号墳はわずかな墳丘があり、その頂上部に大きな石が1個残っている。このうち調査のあった1号墳は、明治32年4月9日に、地元有志によって発掘されているが、当時の墳丘の状態が今日と同じであったかは不明である。地主金箱国武氏の話によると同様な状態であったらしい。この時の調査情況は（註4）。

『五郎兵衛新田土合1号墳は、明治32年4月9日発掘され、遺体と共に多数の副葬品の大半は、当時の東京帝室博物館の有に帰したが、その中には銀象嵌のある鎧鱗も含まれている。この古墳の石室は南方に開口し、底面は、下から玉石層、小砂利層、砂層の順で平らに敷かれていた。その羨道に近く、頭骨、それより奥に脛骨が位置していたとのことであるから、入口の方に頭をおいて奥へ石室の中軸線と並行に遺体を横たえたものと思われる。遺体の左側に並行に刀の類があり、頭部の辺に玉類、頭部より一層羨道よりに土器類、頭部の左方、玄室の片すみに馬具の類が配置され



第2図 浅科村土合1号墳遠望

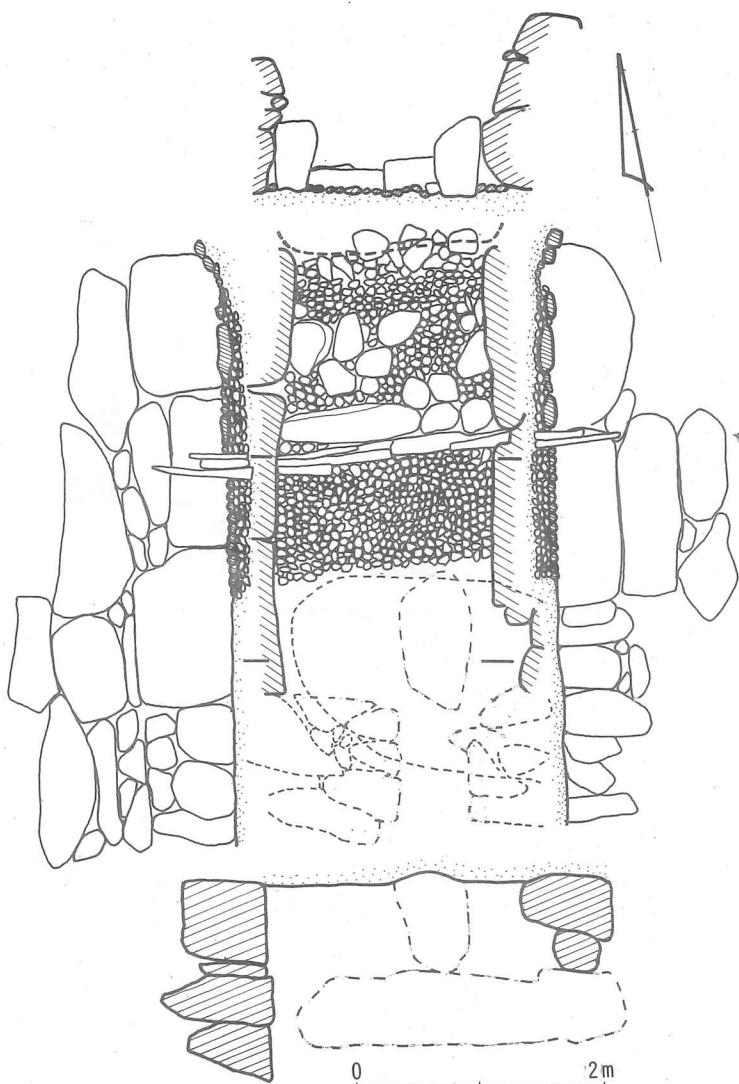
てあったという。』更にその記録によれば、刀剣(10)、その附属品(9)、鉄鎌(10)、勾玉(4)、切子玉(4)、管玉(2)、小玉、鉄環、土器類、数点、轡、鑑等が副葬されていたことになる。土器は埴部(土師器)1点を除いて祝部(須恵器)の杯、ヰ、平瓶の出土が報告されている。第4図7~8の勾玉、10~11の管玉、28の丸玉、31, 32の鎧、54~56、38~39の刀剣付属品、第5図轡、第6図3, 4の須恵器等が、明治の調査物である。

4. 古 墳

土合1号墳は封土がなく、すでに流出してしまったものと思う。積石塚であったとは思われない。天井石は入口の部分の1枚のみでそれも東側へずれて、他の天井石と奥壁石は持ち去られてない。石室の側壁が露呈していて、石室は石や土でうめられていた。東側壁の1箇所から盗掘したらしく、石が石室内へくずれおちていた。入口部は石が積んであり、石室の閉塞石である。残っている天井石の上には石祠と石造五輪塔姿の1部がおかれていた。石室部は長さ5m、巾3.5m、高さ1.8mの規模である。清掃は入口の部分からと、天井石のない石室奥壁部から行なった。

内部構造(第3図) 南に開口する横穴式石室である。玄室の平面形は長方形を呈し、やや胴張りの傾向が認められる。玄室の現在長は5m、奥壁部巾1.6mで、玄室中央部が巾1.8m、玄門部巾1.6mで、玄室の中央部がもつとも巾広くなっている。

奥壁はとり去られている。その部分は凹んでおり、その裏側には割石がつめられていた。側壁は、東側高さ1.4m、西側高さ1.8mを測り、東側中央部3段のほか、1段。西側3段~4段を算え、40×140cm程の比較的大きな石を用い、小口積、あるいは横口積とし、西側壁はほ



第3図 土合1号墳石室実測図(1:60)

は垂直であるが、東側壁はやや内傾している。側壁背後の裏ごめ石は、すでに崩壊しており明瞭といえない。石室の基部は玉石が10cm位敷きつめてあり、入口から3m入ったところに鉄平石を使い境石をつくり、石室を2室にわけており、奥室は1段と高くなっている。前室の入口部分は大きな石が敷きつめてあり、閉塞石が西半分残っているため、その部分は、とりはずすことはできなかつた。

境石は鉄平石3枚を横にしており、その両端前面には細長い鉄平石をたててある。奥室は前室より10cm程高くなつており、玉石の下にまじって大きな石が使用されている。

遺物の出土状態

最初の発掘のときの状態は前述したとおりで、今回は玄室内から石や土とまざり、須恵器片が多数発見され、その破片の中から接合して長頸壺が1つ完形となつた。入口部分から白玉が、前室のほか中央付近から人骨が出土し、境石付近に入つて、東隅から直刀、鉄鎌、刀付属金具が、西隅から堤瓶が出土し、全体に木棺用の釘が出土した。奥室玉石の下にまじつて、玉類が出土し、勾玉、管玉、白玉、小玉、金環が発見された。しかし、武具や、土器類そして人骨は全然なかつた。また閉塞石付近及び羨道部は清掃に及ばなかつた。

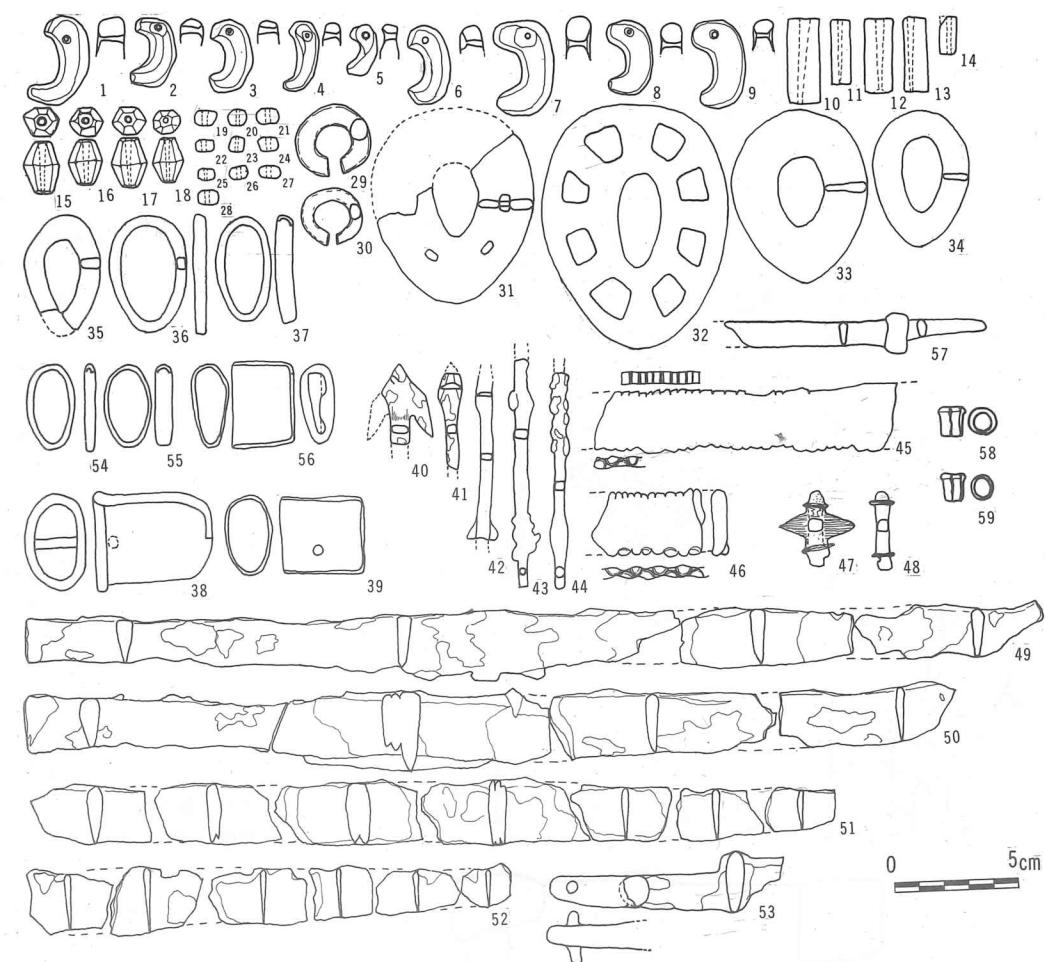
5. 遺 物

玉類(第4図19~28)

小玉計63個が発見された。ガラス製で色調は、ブルー、黒色、緑色、濃青緑色。厚さ1.5~2.0mm、直径3.5~4.0mm孔径0.5~1.0mmを計る。丸玉は計13個が出土している。すべて玉石に交つて発見された。径6.5~8.5mm、厚さ4.5~6.5mm、孔径1.0~2.0mmのものである。蛇紋岩製1個の他は濃紺色11個、青色1個のガラス製である。

勾玉(第4図1~9) 瑪瑙製7個、水晶製1個、蛇紋岩製1個の計9個あり、4をのぞいては「コ」の字形に近い。整形は比較的丁寧なものが多く、稜線はつくが、他は滑らかに磨かれているものもある。穿孔は殆んど第1次的に片面から貫通させ、その裏面は孔の周辺のみを抉っている。また、ほぼ同じ大きさで穿孔しているものもある。その場合両面ともにその孔の周囲を広範囲にくぼめている。

管玉(第4図10~14) 計5個出土している。すべて碧玉製で、濃緑色から淡緑色まである。研磨の状態は良好で艶があり、穿孔はすべて片面からである。長さ2.5~3.5cm、巾0.8~1.4cm、孔径4~1.5mmを計る。14



(第4図)土合1号墳出土遺跡(1)(1:3)

番号	長さ	巾	胴部の巾	孔部の厚さ	第1次穿孔の孔径	材質
1	3.6	2.1	1.2	1.0	0.35	メノウ
2	2.8	1.7	1.1	0.7	0.35	"
3	2.9	1.7	1.1	0.9	0.35	"
4	2.9	1.2	0.8	0.7	0.3	水晶
5	2.0	1.1	0.7	0.7	0.25	メノウ
6	3.2	1.7	1.1	0.7	0.25	"
7	3.8	3.4	1.3	0.7	0.35	"
8	3.0	1.7	1.1	0.7	0.15	"
9	3.6	2.1	1.2	0.7	0.15	"

第1表 土合1号墳出土勾玉計測

は、長さ 1.5 cm の小さいものである。

切子玉(第4図15~18) どれも透明水晶製で、中腹部断面图形は6角形、側面6体であるが、正六角形ではなく、角稜はどれもかなり磨耗した状態で、各面とも損耗痕が著しい。穿孔は一方からである。

金環(第4図29, 30) 銅芯金張りの環であろう。すべて金が剥離して地金も腐蝕している。29は、厚さ8mm、 2.8×3.0 cmの立派なものである。

直刀(第4図49~53) 明治32年の発掘には、10本が出土したという。今回の清掃で出土したのが図にあるものである。腐蝕が著しく、また数本が付着して出土し、復元図としたものである。49は茎と刀身の一部が残るもので、ほぼ刀身部の完全な姿で、推定40cm位になろうか。茎は12cm、両側に作られ、刃側は撫角式で、刀身は幅2.5cm、棟厚0.6cmある。身幅と身の厚さが、基部より先端へ行くに従い細く薄手になる。49, 50は全体上刀身に外反りがみられる。50は、茎と刀身のやや完全にみられるもので、これも刀身は約40cm位になろう。先端部は鷲切先刀で外反りがみられる。木目痕の付着は認められない。51, 52は、長刀の1部で、全身は断定しがたい。53は茎部で、中腹に抉り込みが作られ、その断面は円形となっている。丸みの釘が2本残っている。刀身部は幅2.4cmのもので、51, 52とつながるものであろうか。50, 51の刀身部にみるとおり直刀片を復元すると6本分の刀片がみられる。

円頭把頭(第4図38) 鉄製武骨な造りで、高さ4.7cm、幅3.6cm、断面は 3.9×2.6 cmの楕円形で、合せ目が突出している。懸通孔が貫通しているが、鳩目はみられない。肉厚は3.6cm、鍛造はしっかりしている。記録によると、銀象嵌鐸が付属されている。39は角頭把頭のものである。

切羽(第4図35, 36) 鉄製の切羽で、35は4.8×4.1cm、厚さ4mmの倒卵形をしている。これは頭椎把頭に付属するものと考えられる。

鍔(第4図31~34) 31は半欠品であって推定6窓倒卵形と推定される鍔である。復元すると 7.9×6.4 cmで厚さ4mm。

32は、8窓倒卵形の完成品。 9.9×7.1 cm、かなり大形の鍔である。銀象嵌鐸のある鉄製鍔である。

33, 34は鉄製無窓倒卵形で、鍔の周辺がやや高くなる。

鞘金具(第4図37, 54~56) 37, 54, 55は鞘の外装を紋める銅金具で、飾り金具である。37は鍍金され、美しいかがやきを残している。56は鞘の先端の金具と思われる。

鉄鎌(第4図40~44) 鉄鎌の腐蝕破損はひどい。40は平根鎌の先端である。

41に三角形の尖頭鎌の刃部がみられる。42~44は鎌の茎部と頸部の残欠部である。鉄鎌の形は、いわゆる長頸鎌の範疇に入るものであろう。

小刀子(第4図57) 1本認められるが完形品ではない。基部のみで全長はわからない。

釘(第4図47~48) 12本ともほぼ全体から出土し、前室に多くみられた。長さ3.1cm、幅0.5cm、厚さ0.5cm、いずれも大部分木目片がひし形に付着している。

轡(第5図) 記録による出土品で、1組みられている。引手棒が比較的長く、引手棒は断面八角状であるが巻状ではない。環状鏡板の鉄具部分は作り出しあるが、舌が取りつける様に足穴がついている。銜は二連式接続部は合せ目がみられる。

用途不明金具(第4図45~46, 58~59) 鉄製品、刀剣の付属品であろうが判明しない。

須恵器(第6図1~4) 1は須恵質の長頸壺である。口径6.9cm、高さ17.9cmを計るものである。2のさげべは、口径6.9cm、高さ17.3cmのもので、きわめて良質のものである。3~4は記録にみる明治時代の出土品である。

6. 結論

土合1号墳清掃の結果

1. 石室は羨道がなく、今まで羨道と考えられていたところは閉塞石の部分であった。

2. 石室の平面形は中央がやや外にふくらむ胴張りである。

3. 石室は中央よりやや奥で鉄平石で仕

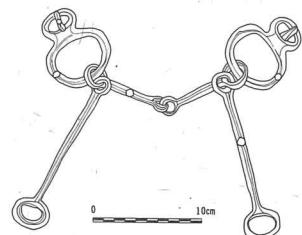
切られ、前室と奥室とに区切られ、奥室は1段高くなっている。

4. どちらも基底部は玉石がしきつめられ、奥室では大きい円礫や細長く平たい石も玉石と共に使用されている。

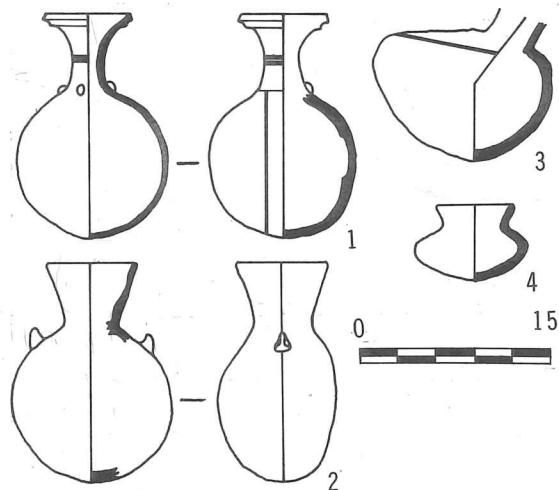
5. 遺物は前室から人骨、木棺釘、武具、須恵が出土し奥室から玉類が出土している。

6. この古墳は追葬があつたものと考えられる。

さて本墳の出土品を整理し、二、三考える点を指摘してみたい。直刀(16), その付属品(15), 鉄鎌(14), 勾玉(9), 切子玉(4), 管玉(5), 丸玉(13), 小玉(63), 鉢(1), 金環(4), 轡(1), 刀子(1), 釘(12), 須恵器(3), その他となる。本古墳の築造年代を定めるに適切と考えられ



第5図 土合1号墳出土遺物(2)
(1:5)



第6図 土合1号墳出土遺物(3)(1:6)

る須恵器をみると、ほぼ器形から7世紀前半から7世紀末葉に位置し、古くとも6世紀中葉以前にはさかのぼらないと推定される。

直刀と刀装具には鰐切先平造直刀や銀象嵌円頭柄頭、切羽があり、共に8世紀初頭の産物と考えられる。鉄鎌は、平根鎌がみられ、長頸鎌であって、7～8世紀にみられるものと考えてさしつかえない。

以上遺品の上からは7世紀末より8世紀に及び、古墳に追葬が行なわれたことが充分想像できよう。

次に付近古墳との関係を対比しながらまとめとしよう。布施川扇状地につらなる浅科地方の古墳群は、総数22基がみられ、御牧ヶ原台地の山腹側に、径10m、高さ3.5mの円墳火の雨塚が位置し、この古墳石室は、長さ4.35m、巾1.4m、羨道長1.65mを計る玄室三昧線胴形を呈している。百沢に柳沢古墳群(5基)が平地、山腹に立地し、積石塚のある入の沢古墳群、布施谷に入り、山腹に八塚、入柳沢古墳を見る。

この地域の古墳、土合1号墳は、石室状態副葬品から6世紀末にさかのぼる様で、佐久平の単独古墳が6世紀末～7世紀初期にあることから、山間部に立地する点一応注目される。(註5)さらに、遺品中年代が降下することから、追葬の風習は7～8世紀にわたり営なまれたと推定される。

使農諸牧の勅旨である「望月牧」は著者で、この呼称は貞觀7年12月29日(西暦865年)、信濃諸牧の貢馬日を8月15日に定めて、この時多くの產出した。この付近の牧場が以後望月牧となつた。牧の機能は応仁の乱頃まで貢馬されたという。従つて望月牧と呼ばれる以前、牧の別名が存したのである。それが前述した須釜の原

地籍付近であつたか、今後の調査をまちたい。須釜には、須恵窯址が20基以上あり、その時期は7世紀初頭～8世紀に加味されている(註6)。御牧の中心地が、御牧ヶ原全域に及んだのは9世紀以降であり、望月牧が立巻する以前、私牧が存したとすれば、浅科地域の扇状地、鹿曲川流域、八丁地川扇状地にあたる。それ等馬匹の飼育には帰化系技術の導入もあり、古東山道筋にあたる、土合1号墳にみる如く、その埋葬者の性格に中央的な官人的要素が存しているのが佐久平山間部古墳の特色といえる。

(註7)

遺物の実測には、1部を藤沢平治、土屋長久両氏をわざらわした。

註

(1) 小平小平治「長野県佐久郡古墳及諏訪郡石器時代遺物」『東京人類学会誌』9の91、明26

八幡一郎「原史時代遺跡」『北佐久郡の考古学的調査』昭9

土合1号墳の遺品のうち、写真は八幡氏の図版31の3、4、同34下段にみられ、昨年「目で見る信濃資料」信濃美術館に出展された。

(2) 坂井鉄平「信濃最古の梵鐘」信濃14の2

(3) 藤沢平治「中山道瓜生坂祭祀遺跡」信濃第19巻第4号

(4) 当時の資料では

『第48号

曲玉1個、鎌穂1本、土器1個、素焼土器1個、轡1個、矢の根拾本、刀剣拾本、刀剣付属品9個、メ8点
右東京帝室博物館へ寄付相成辱々受領候也。明治33年7月31日 帝室博物館総長股野琢印 金箱国太郎殿
御牧尋常高等小学校長浦部部一郎殿』

とあり、ここに記載ある遺品以外は地元に返品されたようである。

(5) 大場磐雄「信濃の古墳群の性格」『上代文化』21。

岩崎卓也「長野県における古墳の地域的把握」『日本歴史論研究』所収昭39。

(6) 神津猛「北御牧村八重原の製陶址」『信濃考古学会誌』第1輯、昭4。

(7) 桐原健「頭椎太刀佩用者の性格」『古代研究』第56号、昭44。